

秋田大学

日本語・日本文化研究論文

現代社会の同調圧力についての一考察

—行動させる社会—

秋田大学教育文化学部

アダム マンスル

日本語・日本文化研留学生

指導教員： 市嶋典子 先生

感謝

本論文を作成するにあたり、指導教員の市嶋典子先生から、丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。また、協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

目次

1.	はじめに.	4
2.	同調圧力.	5
	2. 1. 教義 は同調圧力の原因.	6
3.	データ分析.	8
	3. 1. 研究方法.	8
	3. 2. 分析過程.	8
	3. 3. 対象者.	8
	3. 4. 同調圧力の場面.	8
	3. 5. 日常生活で感じられた同調圧力.	13
4.	結論.	17
5.	参考文献.	19

1. はじめに

育った社会で、規範に逆らう人がほとんどの場合は批判された人のだ。例えば、母親は看護学校で勉強していた時に、大変非難された。なぜなら、その社会で女性の役割もう決められたので、それを逆らったら、コミュニティ全体を逆らっているようになってしまうということだ。私はこの現象を認識することができたら、育った社会でのルールを疑い始めた。

田舎で生まれ、ドゥルーズ¹と呼ばれる保守的な少数民族として育てられた。幼いころ「同調」という概念を考えたこともなかったのに、成長するにつれ、周りの人がしていることに気がつき、だんだん同じ行動を取らなければならないというのが分かってきた。しかし、どんどん自分の人生を制御している社会より、個人が個人として生きることができる社会が勝るということを理解し始めた。

この論文のテーマは、最初に「性役割」というテーマであったのだが、調べれば調べるほど、化粧しなければならないという圧力は単に他の大問題の断片であることが分かった。化粧しなくても、化粧しすぎても、非難される可能性がある。流行と一致しない服を着たら、非難される可能性がある。普段使わない言葉で話せば、非難される可能性がある。つまり、自分の行動が環境に合わなければ、非難される可能性がある。それは同調という社会現象である。それは秋田と少し故郷と似ているような感覚だった。

もちろんこのテーマについて書くのがあまり簡単ではないし、読むのも簡単ではないのだが、私の課題は周りを見ながら、興味があるところについて書くという課題であった。書きながら「なぜ敏感な話なのか？伝統とか食べ物とかアニメとか他の日本の特殊なことについて書いたらどう？」という声が頭の中に鳴っていたのだが、結局に、その声が「ある問題について違う視点をはっきり書いたら、役立つはず」という考えに負けた。従って、化粧やいくつかの例によって、本論文では同調圧力という社会現象を明らかにすることを目的とする。

¹ドゥルーズとは、レバノンを中心に、シリア・イスラエル・ヨルダンなどに存在する宗教の共同体。

2. 同調圧力

同調というのはそんなに理解しにくいことではない。200 万年進化している人類にはそのような振る舞いが本能になるのも無理はない。なぜなら、前世界の環境が昔の人類には非常に危険だったので生き抜くために、集団を作り始めたり、教義を作ったりし、ほとんどの場合に一番凝集^{ぎょうしゅう}な集団が生き残った集団だということである²。だから、個人が集団に所属できなければ、安全に生存できないということが言えるのである。その集団に必然的に所属する必要は同調の基だと考えている。

そのようなグループの安全または連帯感を感じたことがあるのであろうか。なぜ私たちはいつも強く、よく同期が取れるグループに引かれているのであろう。それは生き抜くという我々に根ざしている本能である。従って、同調という社会現象は心理的な現象だけではなく、生物学的な原因もあるはずである。現代に、自己定義ということは、ほとんどの場合「どんなグループに所属しているか」ということになった。極端に言い換えれば、自分がどんな人かということは、どんなグループの所属に依存しているのではないのであろうか。例えば、どんな大陸^{たいりく}、地域、国、州、県、地方、人種、宗教、理想、信念、家族、大学、部活、会社などのグループが自分の性格や決断に影響を与えることだ。

何世紀も、人類はグループのための自己犠牲や「万民が一人のため、一人が万民のため」などの価値観について神話や物語を作ったり、代々に伝えたりし、そのような話を魅了^{つちか}していった。それは培われた帰属意識という当然になった感覚である。一番大きく、強いグループが生き抜くという今の状態は昔と似てるのだが、現代に一番深刻な危険が自然の危険ではなく、我々という危険だ。なぜなら、誰かに「一番危ないことは何」を聞かれたら、場所によって、大体の答えは他のグループであらう。

進化の仕業なので、同調圧力というのは日本にある現象だけではなくて、世界中にある現象だと言えるのである。自国であるイスラエルは、昔からの割礼という宗教的な習慣が今まで続いているのだが、宗教的な理由だけではなく、大部分の子供を割礼している親達は「皆やっているから」や「社会に所属するため」という理由を宣言しているのである。割礼というのは単純に言えば、男子（自国で、ほとんどの場合に、生後 8 日の赤ちゃん）性器の包皮の一部を切除するということである。そのような残酷な行動やはり初めて聞いた人にはありえないことだが、所属するために人間が今まで不合理な行動をし続けているのである。しかし、2 万年進化した

² Gellner, Ernest, "Plough, Sword, and Book The Structure of Human History" (1989)

人類なのだが、原始時代の集団の精神や神話をまだ取り除くことができないのであろうか。

2. 1 教義は同調圧力の原因

「トマトは野菜である」「コーヒーはコーヒー豆から作られた」「コウモリは盲」「万里の長城は宇宙に見える」ということは、全部思い違いである。懐疑は事実を知るための第一歩である。しかし、「事実」という客観的な概念と「意味」という主観的な概念は最近、区別できない傾向にあると考えられている。従って、区別できるようになるために、今までの人生で学ばれたことや吹き込まれたことを懐疑したほうがいいのではないであろうか。

教義というのは、大体宗教的な表現なのだが、教えられたことや吹き込まれたことを盲信し、どんなに不合理でも、議論する気が全くないということなのである。そのような教義は我々の日常生活または行動を定めていることなので、本当に議論や懐疑できない思想があるのであろうか。一番簡単なのは問題と向き合わず、問題を避けながら生き続けることなのだが、割礼のようなくつもあつた問題は極端に過激なので我々がそのような問題を揶揄し、暴露するべきだ。

思考実験というのは頭の中で想像する実験ということである。例えば、子供の時に、悪いこと良いことを区別できなかったのも、皆がしていることに参加し、どんなに極端な行動でも、応援している環境があれば、自分にはそれが当然な行動に見えた。しかし、成長しながら、教えられたことや吹き込まれたことを疑うことができるのか。

自国の社会では、「コントラバーサル」の議論や意見をやり取りするのが日常生活の燃料である。それは良いかどうか今の議論ではなく、ただ秋田の真逆ということ強調のための例だ。「コントラバーサル」という言葉の一つの意味は「論争を招く」という意味である。

私の大学で、いつも政治的や宗教的のような話題について議論されているのだが秋田大学ではそのような議論は大体避けられているという感覚だった。秋田で体験したことは、私からすると話題がそんなに敏感ではないのに、いつもそのような話が始まる時、雰囲気が一瞬で悪くなり、皆静かにする。しかも、そのような話題について人々が進んで議論するまたは意見を述べるのが幾分困難のような雰囲気なのだ。

もちろんいろいろな理由があるし、文化の違いもあるのだが、自分の意見を言わなければ、ふりをしている一類になれるのではないのか。割礼や石打ち刑のような我々の大問題について議論しなければ、どのように変えるのか。自分の信念について、違う文化背景から来た人と意見をやり取りしなければ、どのように人間として

成長するのか。どのように考え方が変わるのか。何人かが思うのはそのような敏感な話を避けたら、結局に問題がなくなる。だが、自己解決できる問題がなさそうなので、問題ががつつり取り込むしかないであろう。いくつかの話題はタブーになってしまったら、限界が生まれるはずである。サルマン・ラシュディが言ったことは「人々はいくつかの概念が批判、^{ふうし}風刺、^{ちょうしょう}嘲笑、または^{けいべつ}軽蔑を批判できないと宣言したら、思想の自由が無理になるのである。」

それだから、「教義」と「教育」を区別するのが必須だと考えられる。意味が少し似ているので、混同しやすい場合がある。違いに集中すれば、「教育」というのは、自分で事実を探索し、現実について勉強するということである。その一方で、「教義」というのは、人々が「事実」として信じるべきだという教え方なのだが、その「事実」が証明された事実ではなく、個人的な意見に基づき事実なのである。つまり、「教義」というのは、「何を考えるべき」ということなのだが、「教育」というのは「どのように考えるべき」ということである。

3. データ分析

3. 1. 研究方法：半構造インタビュー。インタビューの前に決まった質問は「いつから化粧している」「いつ化粧する」「化粧しなければならない場合がある?」「化粧しなくて、非難された場合がある?」「なんで皆と同じようにしないといけない?」「化粧したくない場合ある」「どのくらい頻繁に化粧する」のような質問だったが、インタビュー中で考えた質問もした。一つのインタビューは国際交流会館という秋田大学の寮で、平成 29 年 29 日 5 月の 22 時頃に行われた。もう一つは秋田大学の図書館で、平成 28 年 29 日 7 月の 12 時頃に行われた。

3. 2. 分析過程：

- i. 全てのインタビューを文字にした。
- ii. 内容を何回も読み、同調圧力の場面が見えてきた。
- iii. 場面によって、データを分類し、適当なデータを論文に載せた。

3. 3. 対象者：同調圧力の事例として、化粧について伺いたかったし、客観的に対話をすることができる人とインタビューしたかったので、下記の人とインタビューの相手にしたことになった。

3. 2. 1. まゆ（別名）は 22 歳であり、4 年生の秋田大学教育学部の女子学生である。英語教師になるために、勉強している。出身は秋田県の田舎である。

3. 2. 2. めぐみ（別名）は 21 歳であり、4 年生の秋田大学教育学部の女子学生である。英語教師になるために、勉強している。留学生として、一年間イギリスにいた。出身は埼玉県の田舎である。

3. 2. 3. ひかる（別名）は 23 さいであり、4 年生の秋田大学教育学部の女子学生である。留学生として、一年間イスラエルにいた。出身は秋田県の田舎である。

3. 4. 同調圧力の場面

3. 4. 1. 教育現場にある同調圧力

3. 4. 1. 1. 「出る杭は打たれる」

まゆ：出る杭は打たれるから？皆と同じじゃないと打てられるから。

アダム：そういう感じはいつ初めて感じた？

まゆ：高校の時かな、授業の時、宗教とか、世界の哲学の授業とかの授業があって、私もう、あまりにも興味があったから、授業中、手あげたかったんだけど、先生もなん

か、自分が教えたいことに必死で、質問あるかどうかとも聞かなかったし、私聞きたいことめっちゃあったけど、皆手あげないし、皆そもそも聞いてないから、私皆の前で手あげてできなかったから、授業終わるために、毎日先生のところに行って、個人的に聞いてた。だから、皆手あげてないから、あっやめようという風に思った。

アダム：それはいいこと？わるいこと？どう思う？

まゆ：悪いことだと思うよ、だって自分の考えを変えられるんだよ、洗脳じゃん、って私は思う。幼稚園のころね、赤い色で海描いたら、「変えろ」と言われて、青で変えた、途中から。それもそうだと思う。出る杭打たれたんだと思った、5歳か4歳のころに、多分それが初めて、

めぐみ：ダメだと思う。多分、普通だったら、先生だったら、「ああ、面白いね」ってその赤い海とかを「こんな考え方もあるんだね」って、なんかちゃんと受け止めてあげるのが普通だと思うんだけど、でも「普通は海は青なんだから、青で描かなきゃいけないでしょう」みたいなのは、違うと思う。なんか押し付け？、こうしなきゃいけないのよって、なんかパーンパーンパーンみたいな

ひかる：凄い積極的過ぎると「あの人なんだろう」、まあ、言わないんだけどみな、でも壁ができる。その人、もしまわりを見えない人で自分の意見をはっきり言うと孤立しちゃう。だから、気を使うようになる、だんだん。小学校から高校まできて、大体わかってきてるか、あまり言いすぎると、浮くというのがわかるから。周りが言いたそうだったら、一緒に言うけどなさそうだったら、自分もいわない、黙ってる。小学校の時結構言ったよ、でもだんだん陰で「うるさい」とか「空気が読めない」とか面倒くさいけどそういうのもあるから。高校の時、もし皆で「これをやろう」って、「これを作ろう」言ってるときに、私一人で「こうやったほうがいい」とか、私言わない。非難されるも怖いし、説明するのが面倒くさいし、「空気読めないやつ」って言われて、怖いというのがあると思う。

いろいろな意味があるが、「出る杭は打たれる」ということわざはの一番良く知られている意味は「目立ったらダメ」という意味である。上記を読むと、いつからそのような圧力が始まったのかがよくわかってくる。中学校生や高校生の時、好奇心が一番高い時、「周りの人がしないから私もしない」が始まる。中学校生の時、私もそのような圧力を初めて感じた。違う音楽を聴き、違う運動が好きであり、言語を学ぶために違う言語で話したかったのだが周りの人がそうしなかったので少しためらった。少し非難され、少しいじめられたのに、高校生になったら、三つの言語を話したり、二つの楽器を奏でたりした。ためらわずに、やりたいことをやった理由は中学校や高校の先生であった。彼らが違う視点や意見を丁寧にやり取りを奨励したので、勇気を持

つように始めた。それは私からすると、先生の役割だと考えられる。なぜなら、先述べた通り、同調圧力は産物だと言える。

もし多元的な環境に教育したら、その環境で議論しやすくなり、いろいろな考え方が生まれるかもしれない。もしその我々の考え方を挑戦しないように教育したら、その「違い」の存在に包容力がなくなり、同調圧力が生まれる。

3. 4. 1. 2. 教室外の圧力

めぐみ：実際なんか、小学校の時に苛めとかあって、やっぱ、目立つといじめられる。なんか私とかは、いじめられた時もあったし、逆にいじめる側に入っちゃった時もあったし、いじめられてるこ救ったこともあったもんね。全部経験したけど、私凄いい体が大きかったのね、小学校の時、だからなんか、皆から凄いい怖がられてた。女の子一人さいじめられてて、男の子に、でだれも助け合をしなかった、もし助けたら、自分がいじめられちゃうから。でも、私はそれを見てるの嫌だったのね。だから、その子と仲良くし始めた。そうしたら、皆めっちゃ変わって、あの子と普通に挨拶するようになったよね。だから、見えないものを読み取るみたいなのが凄いいちちゃい時から皆そなわってると思う、日本は特に

めぐみ：ランドセル、なんか小学校って、決まったをもたなきゃいけない、ランドセルというのがあって、女の子は決まって皆赤、男の子皆黒、絶対それをもたなきゃいけない。だから、男の子をしょてたらそれはおかしい。女の子が黒ランドセルしょてたらそれもおかしい。私よりもちょっと下の学年ぐらいから、いろんな色ランドセルが始めて、自分の好きなランドセルが使えるようになったんだけど、私たちの時は皆赤、皆黒、だった。

学校の時、初めて周りの人との相互作用が大切になるので、人生の中で非常に重要な段階だと言える。しかも、学校の時、社会によつての「普通」の概念をみにつけられると考えられるので、無意志に自分の意見や考えが大事ではないということを身につけてしまったら、「自分」の重要性がなくなる可能性もあるし、身につけたことを忘れるのが無理のようなことになるかもしれない。だから、自分の考えが皆と合わせるようにするという事は苛めの結果かもしれない。その時から同調圧力が始まるのだが、同調圧力を悟るという意味ではなく、当然に「普通」になってしまい、賛成しても、賛成しなくても無意識に大多数に従うということになる。

もちろん人間は社会的な生物なので、他の社会的な生物のように、生き残るために群れを作つたのだが、まだその「群れ」のマインドセットが必要なのか。人間はダーウィンやガリレオ・ガリレイのような「群れ」の考え方を挑戦した人のおかげで、進

化できたのではないのか。もし「意見をはっきり言う勇気がなければ、どのように新しいアイデアがうまれるのか。

3. 4. 2. 職場にある同調圧力

3. 4. 2. 1. 就活のための容姿

アダム：だから、女が美人になるしか期待がないと思う？

まゆ：まあね、美人で細くて、あとほら、就活の時写真も送るじゃん、それも髪ぴっち一ってあって、ちゃんとうすめのまあ、きれいな化粧した写真を送って、それでも落とされる人がいるし、写真と髪だけでね、やっぱそれのも、多分男女ともと思っただけどさ、就活に関しては。

アダム：それはどう思う？美人だったら、十分？

まゆ：という社会だと思う。私この前友達に聞いたんだけど、教員採用試験の試験の時も写真を送る。あとスーツも決まってて、シャツもなんか結構ふりふり？なんか私びっくり知らなくてさ、でもスーツを着るって決まりないんだよねとか、私聞いたもん、決まりないよねとか、髪ぴっちとしてるとか決まりないんでしょうって、なんで？って聞いたら、「じゃしほは、その面接官だったら、髪ぼさぼさの人と髪ぴっちりしてるひと、どちらをとる？」と言われて、私なんかそもそもその面接の会う前にもはねたりとか、それがどうしてかわからない、話してみなきゃわからないって、私だって髪がここ茶色に染めてるけど、話してみれば、印象変わる人もたくさんいるかもしれないじゃん、と思うんだよね。

めぐみ：女性は皆就活ようメイクアップこうざとか、そのように行って、就活のためのメイクアップをならいに付きいくらとか、出して、お金を払ってそういうこうざに行く。

美というのは自分で決めることはないと考えられる。子供のころから、周りを見ると、皆が「美しい」と「みにくい」と思っていることがだんだん自分の考えになる。もちろんいつもそうではないのだが、美意識は環境から非常に影響を与えられたことだと言える。秋田にいる時、2人の友達が就活をする前に髪を真っ黒を染めた。2人に「なんで？」を聞いてみたら、彼女達が「皆そうする」や「茶色はだめ」と答えた。インタビューの相手は就活の時、外見が大事だけではなく、目立たないように外見を整えるというのを意識している。目立たないようにというのは同調圧力だと言える。なぜなら、個性がなくなるぐらいの行動だということだ。しかも、茶色の髪を持っている社会人を見たことがあるので現実がそんなに厳しくないというのが分かるのだが、相手のような考えがあったら、それが同調圧力の一つの証明だと言える。

3. 4. 2. 2. 「バイトだと、化粧しないとイケない」

アダム：バイトの時いつも化粧する？

めぐみ：バイトはする。いつも。しなくちゃいけないから。しょうがないって思う。

アダム：それは職場の決まったルール？

めぐみ：決まってないけど、身だしなみだから。もし化粧しなくて、「どうしたの」みたいな（質問される）。もし毎日してなかったとしよう、でバイトにもしてなかったとする、毎回毎回。いつもしてるのに、いきなりしないでいったらそれはおかしいでしょう。

アダム：でもそういう日もあるよね、化粧したくない

めぐみ：それはバイト気がないと思われちゃう。自分がしたくないかしたいじゃなくて、まず相手のことを考える。

ひかる：すっぴんで行きたい時もある、朝遅刻しそうになった時とか、面倒くさい時だけど、してないと、やっぱわかるから、見られたくない、はずかしい。一回だけ、すっぴんで行って、男に「ひかるさん、今日なんか違うよ、すっぴんでしょう」と言われた。すぐはずかしくなって、たぶん女の人たちは分かってたから、「あっ、遅刻したし」、でも男は「あれ、違う」と言われて、嫌だと思って、それからバイトは絶対化粧して行く

職場の規則に従うということが当たり前だが、ルールではないのに「化粧しないとイケない」というのはまだ少し分かりにくい。私にとって、「化粧しない」ということは「身だしなみを整えない」という意味ではない。実は私からすると、化粧し、どんなに美しくなっても、それが本物ではないので、美しい嘘より苦しい現実のほうが良いし、騙されるのが好きではない。しかし、一部の人々には贈り物より、包装のほうが大事なので、「どんなに内面が良くても外見が悪いとやっぱだめ」と思っているし、「外見が悪い」ということは「化粧しないという意味になってしまうのだ。つまり、外見によって、偏見ということだと言える。女性が自分で化粧したがったらそれは問題ではないのだが、強制的にさせたら、それは問題なのではなかろうか。同調圧力との関係は？従わないと非難されるから。個性が一番大事なことはないから。「相手のことを考えるから」。それは悪くはないことなのだが、相手が化粧についてそんなに気にするか。空港のセキュリティで働いていた時、長い髭を生やし、私も「大丈夫？」という不明な質問されたし、非難された場合もあったのだが、剃ろうと考えもしなかった。しかし、褒められた場合もあったし、真似された場合もあったの

だが、どのように仕事していたのか関係全くなかった。もちろん環境からの評価は重要なことだが、限りがあるのではないのか？ 非難されるの恐れ、または化粧のような些細なことを環境と一致するというのは同調圧力の結果なのである。

規則と社会慣習を少し混同している人が多いかもしれない。つまり、一定のルールがないのに、いくつかの行動が社会的に合わないのもその行動をしたら、非難される可能性がある。だから、全ての文化にその「社会慣習」があるのだが、文化によって、どのぐらい「社会慣習」に従わなければならないのかから、どのぐらい同調圧力があるかが分かる。

3. 5. 日常生活で感じられた同調圧力

3. 5. 1. 大量生産型女子

まゆ：やっぱ、周りの自然が本当にきになるんじゃない？そういう風に育ってきたね、周りからどう思われるかどうか。だから、きれいだったら、きれいと思われ、きれいじゃなければ、「あいつぶすだ」と言われて、ちょっと押し出されるね。

アダム：でも化粧しなかったら、それは唯一の問題だけじゃないよね、化粧やりすぎたら、問題になれるね、ガングロみみたいな、なんで？

まゆ：私には、ある一定の、なんという、ちょっとだけでもきれいに見せるために化粧するかもしれないけど、睫毛をバーさ、非人間的に見えちゃう。やたら多い睫毛とか、めっちゃ大きいコンタクトレンズとか

アダム：それもだめ？

まゆ：だめって言わないけど、非難される、しなくても、されるもんね

アダム：なんで皆と同じようにしないといけない

まゆ：しなきゃいけないことはないけど、やっぱしちゃうんだろうね、多分、同調してることすら気づいてないと思う、それすら気づいてない。

アダム：それは化粧の場合だけ？

まゆ：化粧だけじゃない、服も、外見。

めぐみ：服が一番出ると思う。

まゆ：ね？、大量生産型女子とかね、

めぐみ：やばいね、秋大にもいっぱいいるよね

アダム：なんで自分やりたいことやれない

まゆ：多分それは「やりたいこと」にかわってるんだと思う、皆と同じようにすること？いつの間にか、意識せずに。皆に合わせる事が多分もやりたい、私はね

ひかる：学生はね、髪色を染めても、皆大体同じ色じゃない？黒か茶色で決まってて...

2. 2. 1に述べた通り、美意識は環境から非常に影響を与えられたことだと言える。しかし、上記から見えるのはどのぐらいインタビューの相手が驚いたのかということだけではなく、どのぐらい同調圧力を知らないのかも良く見える。「皆と同じようにすること？いつの間にか、意識せずに。」それは同調圧力そのものだ。具体的な場面ではないのだが、徹底的に読めば、「外見の同調圧力もある」という結論になる。化粧は同調圧力のただ一つの例だが、化粧だけではなく、全ての外見の要素によって、同調圧力があると考えられる。私も秋田で拝見したことは個性的なスタイルがほとんどがないと言える。

3. 5. 2. 中身より容姿のほうが勝る

めぐみ：容姿がやっぱステータスって部分からじゃないかな女性は特に。容姿が良ければ、いろんなこと得られるし、なんか美人であることがステータスみたいな、結構ある日本は。凄いじゅうようされる美人は、顔がきれいとか

まゆ：凄いなんか男の人がさ、彼女ができれば、皆「どんな人」じゃなくて「どう可愛い？」とか「写真見せて」。まあ「顔か？」って感じ、気になるのを分かるけどね。

めぐみ：どんなに内面が良くても外見が悪いとやっぱ、ダメだと思う、日本は。凄い中学校の時に言われたのが、今でも覚えるのが、国語の先生が車運転してたら、めちゃヤクザみたいな人達をバイク乗って、こう走り回ってて、で交差点で、待ってたんだよ両方が、でその信号なくて、どちらがいい先行くかみたいな感じで、その先生怖くて行けなかったんだけど、そのヤンキー達が「先どうぞ」みたいな、なんか譲ってくれんたって、その時になんか、「こういう容姿の人でも、こういういいこととっていうか、ちゃんとマナーを守れるんだなみたいな思ったみたいなこと話してて、やっぱそれは容姿から全部、判断してるから私たちは、だからどんなに、多分海外に行ったら、どんなに格好悪いしてても、認めてくれると思うんだよね。容姿から入らないと思うんだけど、日本はめちゃ容姿か入ると思う。だから、容姿からよくしないと、いいチャンス得られないみたいな凄いあると思う。

これも場面ではないのだが、「美人になる圧力」と関係がある語りである。もちろん美人だったら利点になるのだが、なぜ外見はそんなに重要なことなのかまだ理解でき

ていない。歴史は外見によって人間を判断しないのではないであろうか。もちろんある程度に見た目を整えたが、影響力のある人は、外見そんなに気にしなかったし、得意の原因が彼らの特性であった。しかも、場所によっては、女性の美だけから女性を評価するというのが性差別だし、失敬だと考えられる。インタビューの相手はなぜそういう風に考えているのかいろいろな理由があるはずだが、そのような考えが圧力の兆候なのではないであろうか。

秋田に来る前に、「秋田美人」という表現を良く知っていたのだが、こんなに大事なことになるのは全く考えもしていなかった。しかし、秋田だけではなく、世界中で女性は精一杯美人になるという努力をしているそうである。どうしてそうなのであろうか。美というのは主観的な概念であり、環境から非常に影響を与えられたことである。美という概念はいつも変化しているものである。例えば、平安時代の美という概念は現在の日本と全く違う。しかも、美というのは深く考えれば、人間は自然からきたのに、自然では雄おすという動物の雌雄しゆうめすが雌より派手である。例えば、鳥類の雄はほとんどの場合、雌より綺麗である。なぜなら、一番逞しく、綺麗な雄が雌と交尾に値するということである³。

人間の場合、違うのではないであろうか。自然が人間のもとなのに、他の動物と比べたら、人間は本能的な生物ではない。もちろん本能のままに振る舞う場合あるのだが、大部分の人間は自然からはっきり分離した一種なのである。現在、テレビや広告で見られる内容はどのように女性が美人になるかという内容が多いのではないであろうか。もちろん全ての女性が美人だったら自分には構わないのだが、それは現実的なことではない。現実には「ミス・コンテスト」という概念の通り、一番美貌な女性が全てのご褒美に値するという人気な説話になってしまったのである。更に、女性は外見によって分離されているということになってしまったので、彼女たちの唯一の力が彼女たちの外見の美しさにあるということが説得されたのではないであろうか⁴。

ジェイン・ン・ウッセルは美というものについて、特殊な視点を持っている。「昔話や説話には、いつも苦しいことを辛抱している美しく、綺麗な女へのご褒美が愛情で溢れている白馬の王子様の注目である。そのような瞬間は恋愛の一番大事なことだが、恋愛の将来は全然構わないことである⁵。」このような意見はやはり誰かに極端的な意見だが、このような極端的な意見を読めば、今までの学ばれたことやテレビで見たことを深く考えてくるのではないであろうか。

その意見より、極端的な意見がたくさんである。1792年に最早「美という理想は女性の脆弱性の理由なんだ」という意見が聞こえた。アメリカであった最初のフェミニストという女権論者の大会議は「流行を避ける利権」という名前であった。しかも、

³ Peter Loptson, "Readings on Human Nature" (1998): pp.448-449

⁴ Ussher, "Fantasies of femininity: reframing the boundaries of sex" (1997)

⁵ Ussher, "Fantasies of femininity: reframing the boundaries of sex" (1997)

1970年代の女権論者には、美を整えるというのは圧力であった⁶。極端なのだが、そのような極端的な意見は極端的な状況から生まれるのではないであろうか。しかし、そのような極端的な意見は女権論者に批判された場合もある。彼女たちの意見はそのような化粧する慣行は彼女たちの個人的な選択だということである⁷。

化粧は健康にあまり良くないものという風によく主張される。一つの例はよく化粧品にあるプロピレングリコールという神経毒が皮膚炎、腎障害、肝疾患、皮膚細胞増殖の阻害などの病気を引き起こすということが、ある研究によって発見された。しかも、アメリカで毎年何千人もの人々が化粧品のアレルギーのせいで、入院したのである⁸。

世界中で二番大きな化粧品の工業として、日本の場合、美という概念が変化した理由は消費主義から生まれたと言われるのである。一つの視点は家父長制の欲望だけとして化粧品は女性の経済力を減少させた原因である一方で、も一つの視点は化粧品が経済的な必要性として、女性の美的や個人的に表現するということである。しかも、女性は「美によって評価されたのだが、男性は性格、分際、所得、系統などの社会的な評価である。」⁹

3. 5. 3. 皆違う環境なら、気にしなくてもいい

アダム：化粧したくない場合ある？

ひかる：あるけど、周りの皆がしてるからする。皆すっぴんだったら、しないと思うよ。しかも皆似たような色、くちびるピンク、赤。青とかむらさきとか変な色はあまりいない。誰か自分のオリジナリティとか自分のこだわりを見せようとしてる、「それは派手な子」悪い意味ではないんだけど、びっくりしちゃう。「勇気ある」とか「秋田でそれやるか」。

アダム：東京は違う？

ひかる：やっぱこれは東京だ！秋田だと、違うね。そういう人が少ないし、いると目だちゃう。正直いうと、変だなと思っちゃう。派手過ぎても、アウトだし、髪がぼさぼさ化粧しなくて、さらしが無いって思われるけど大体化粧していて、周りからいい評価される「これはいいね」「普通だね」とかそれが批判されないし、東京そんなことはない。親はそういう風に教えはしないけど、結構学校の時、派手な子と目立つ子とかは結構「あいつは違う」という風に言われるし。いじめられるときもある。小さい時からすりこまれたんじゃないかな。

アダム：ひかるは留学生として他の国に行ったんだよね、その時化粧していた？

⁶ Victoria Pitts-Taylor, "Cultural Encyclopedia of the Body" (2008): pp. 135

⁷ Victoria Pitts-Taylor, "Cultural Encyclopedia of the Body" (2008): pp. 135

⁸ Victoria Pitts-Taylor, "Cultural Encyclopedia of the Body" (2008): pp. 135

⁹ Laura Miller, "Beauty Up: Exploring Contemporary Japanese Body Aesthetics" University of California Press (2006): pp. 35-40

ひかる：あまりしていなかった、実は気持ちの理由もあるけど、はだが痛くなって、化粧したら、もっと悪くなるってしってるから、もうやめようと思って、やめた。でもその時しなくてもいいと思って、自分でも諦めて、それ慣れてて。

アダム：そのはだの問題が日本でだったら....

ひかる：それでも私すると思う、日本だと。やっぱ外国にいろんな人がいて、いろんなスタイルとか、やっぱ国によっても違うし、考え方も違うから、その国に化粧してる子、正直って少なかった、そういう中で別に、気にしなくていいっていう気持ちがあって、皆違うから。誰が誰がか分からない場所に行けば、自由にやれるとか人の目に気にしなくていい。だから、地元で働きたいと思わない。日本では、空気？随分難しいなって私日本人で思うんだけど。

めぐみ：皆一緒。それは私たちの文化。私はあまり好きじゃない、皆一緒というのが。でも、日本の大多数の人がそれがいいと思ってるから、ずっといままで続けてきた。私にはそれがちょっと生きにくいと思っちゃうけど、それが日本だから。よくないとかいいとかは言わないと思う。人それぞれ。私にはよくない

この語りから二つの要点が見えてきた。一つは、都会より田舎のほうが同調圧力がもっと感じることができる。インタビューの相手が述べたように都会では「誰が誰がか分からない場所」なので「自由にやれるとか人の目に気にしなくていい」という宣言に共感された。つまり、人々の個性が見えたら、自分の個性の余地があるという意味なので、周りの集団に従わなくてもいいということになる。私も田舎生まれ田舎育ちなので「皆違うから気にしなくていい」という感じが体験したことがある。なぜ同調圧力が田舎でもっと感じられるのか、それは他の論文のテーマになれるのだが、やはり小さいコミュニティなので、皆が皆を知っているし、伝統の理由もあるかもしれない。もう一つのは同調圧力があると「生きにくさ」が生まれる可能性がある。人間は社会的な生物なので我々に根差している同調圧力という習性を全部解除のが現実的な目標ではないし、同調圧力に悪いことしかないと言えないのだが、その習性を認識したら、いつ良いかいつ悪くなっているのを区別できると考えられる。

東京に、いろいろなアニメのような服を着たり、公園の中でいろいろな楽器を奏したりした人がいたし、自分で決めた生活を個性的にしたそうであったのだが、田舎である秋田に入ったら、一瞬で私の地元を思い出した。なぜなら、地元で皆と違う服を着たり、違うように考えたり、違う行動したりした人が「変」に見えてしまい、皆が大体同じであったということを知った。

秋田で、最初に気付いた同調圧力の場面は外見ということであった。大部分の学生は同じように外見を整え、男子学生が髭を剃ったりし、女子学生が丁寧に化粧したりし、東京で見られた個性的なスタイルがあらかた見えない。さらに、その「外見」についてインタビューの相手に聞いたら、少し予想外に「容姿からよくしないと、いい

チャンス得られないみたいな凄いあると思う。」や「どんなに内面が良くても外見が悪いとやっぱ、ダメだと思う、日本は。」という答えであった。実は外見ということは大体周りの人や環境の影響であり、自分が環境によって、「どのように自分を見せたい」のかということが分かるし「自分をそういう風に見せたいからそういう風に見せる」のような考えもあるのだが、秋田大学に、または、秋田に、個性的なスタイルが少し珍しい。

4. 結論

- データ分析からどの場面で同調圧力が見えたのか：
 - 教育現場にある同調圧力
 - 職場にある同調圧力
 - 日常生活で感じられた同調圧力

違う文化の中にいれば、分かりにくい物事のやり方や生き方があるので、批判的に考えるか、尊敬するかという窮地がいつもあると考えられる。私からすると、人間として、どんな文化でも私の文化になれるので、この論文のような書く機会があったら、ある問題を議論する機会ということだし、その文化に貢献できたことがあれば、機会をとらえるということである。しかも、この絶え間なく変化している世界で、新しい時代に適応するために、我々の価値観や生き方を議論する必要があると言える。例えば、昔の衛生状態があまりよくなかったので、割礼という慣習は健康のためにされた慣習なのに、現在にはそのような慣習をする必要がないと考えられる。更に、いくつかの文化では、女性運転禁止や同性愛者死刑などのようなことがあるのだが、現在の年代にとって理解しにくいことである。だから、そのような規範を議論したり、建設的な批評したりしたら、尊重しないという意味ではない。それがなければ、どのように奴隷制度を廃止できたのか。もちろん「忠言は耳に逆らう」のだが、尊敬しながら、どんなに敏感な話題があっても議論できる。

同調圧力という社会現象は子供から体験していることなので、それについてこの論文のテーマにした。何回もひとりぼっちにならないように所属していたグループに強制的に従わなければならなかった。実はどこにいてもそういう風になれるかもしれない。しかし、当然に従うのをやめた後、「説得」という言葉を発見した。だから、私のグループや社会の行動を賛成しなかった場合に、議論を開始した。もちろん説得された場合があったし、説得した場合もあったのだが、非難された場合もあった。最初にひとりぼっちになりたくなかったが、だんだん議論したがる人と出会い、いつも議論した後、新しいアイデアを生まれたし、知識も増えてきた。

同調圧力というのは問題だけではなく、利点もある。集団の決定を速く決めることができるし、道徳も皆に設定もできるのだが、自分のしている行動が考えずに周りの人と一致すると、同調圧力は問題になる。「強力さがあったら、大きな責任も負う」という言葉は同調圧力と合っているとと言える。歴史は人間の一番いい先生だと言えるのに、皆歴史を知ってるわけではない。歴史から学ぶことは、影響力のあるが人良い行為をするために「同調圧力」の力を利用したということである。その一方で、影響力のある人が酷い行為をするために「群れ」の力を利用した場合もあった。従って、個人の意見の余地がなければ、意見を述べる機会もなければ、その「群れ」は利用しやすくなる。

なぜ問題について書くのか？気にするから書く。3. 3. 3の「めぐみ：皆一緒。それは私たちの文化。私はあまり好きじゃない、皆一緒というのが。でも、日本の大多数の人がそれがいいと思ってるから、ずっといままで続けてきた。私にはそれがちょっと生きにくいと思っちゃうけど、それが日本だから。よくないとかいいとかは言わないと思う。人それぞれ。私にはよくない」。「大多数の人がそれがいいと思ってるから」それは事実ではなく、推測である。しかし、その風に考えているので、大多数の人と議論を避けるために「よくないとかいいとかは言わないと思う」と宣言した。更に、「私にはそれがちょっと生きにくいと思っちゃうけど、それが日本だから。」と主張している。3人の相手は似ているようなことを言った。なぜ問題について書くのか？私も田舎生まれ田舎育ちなので、同じ社会圧力があり、同じ「生きにくい」感じであった。

危険の場合、生き抜くするために、大多数の生物は二つの反応しかなく、闘争か逃走という反応である。しかし、人間はもう一つの反応があり、フリーズする（凍る）という反応であり、言い換えれば、動かない。3人の相手が言った「生きにくい」ということは少し似ているのではないであろうか。例えば、育った社会で「生きにくかった」ので、逃走し、もう田舎に住みたくない。現在に「生きにくい」の場合、議論する（闘争）。他の人は何もせずに、生きる気がなくなってしまったように無関心に生き続ける（フリーズする）。

認知的不協和とは「人が自身の中で矛盾する認知を同時に抱えた状態、またそのときに覚える不快感を表す社会心理学用語。アメリカの心理学者レオン・フェスティンガーによって提唱された。人はこれを解消するために、自身の態度や行動を変更すると考えられている。」¹⁰ということである。ケンブリッジ大学の学者は同調圧力と認知的不協和の関係を証明することができた¹¹ので、いわゆる「生きにくさ」が証明されたことなのである。

ダーウィン、アインシュタイン、ガリレオ・ガリレイ、ニュートン、コペルニクスなどが、人々の考え方を変えた学者は、昔の人々の考え方や同調圧力に降伏せずに頑張り、いろいろなことを発見した。年月が経ったのに、彼らの影響が現代的な科学に残ったし、

¹⁰<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%AA%8D%E7%9F%A5%E7%9A%84%E4%B8%8D%E5%8D%94%E5%92%8C>

¹¹ https://www.cl.cam.ac.uk/~ey204/pubs/2014_EyeTrack.pdf

彼らのおかげで人間が現代のように発育できたのだ。もしその学者は同じ時代に生きていた人と同じように考え、昔の考え方を挑戦しなかったら、今のような世界になれるのであろうか。だから、私の考えるところでは、もし自由に自分自身の外見を決めることができなかつたから、どのように自由に考えることができるのか。

その「生きにくさ」はいろいろな問題の原因なのではないであろうか。もちろん人生はほとんどの場合、簡単なことではないのだが、もっと厳しくすると簡単にならないかもしれない。インタビューの相手は同じ「生きにくさ」を感じたが、その「生きにくさ」が私と話しながら、頭の中ではっきりされてきたことだ。私はどういう風に、人間が生きるべきだと言わないのだが、人口減少、自殺、引きこもりなどのいくつかの日本にある社会問題がその「生きにくさ」から生まれたと考えている。従って、「同調圧力」についての意識を高めたら、またはその話題を議論したら、「生きにくさ」を取り組むことができると思う。

5. 参考文献

Jane M. Ussher, (1997). *“Fantasies of femininity: reframing the boundaries of sex”*, Rutgers University Press

Victoria Pitts-Taylor, (2008). *“Cultural Encyclopedia of the Body”*, ABC-CLIO, LLC

Laura Miller, (2006). *“Beauty Up: Exploring Contemporary Japanese Body Aesthetics”*, University of California Press

Gellner, Ernest , (1989). *“Plough, Sword, and Book The Structure of Human History”*, University of Chicago Press

Leon Festinger (1957) [1954]. *“A Theory of Cognitive Dissonance”*, California: Stanford University Press.

Andrea Guazzini , Eiko Yoneki , Giorgio Gronchi (2014). *“Cognitive dissonance and social influence effects on preference judgments: An eye tracking based system for their automatic assessment”*. 2017年07月20日
https://www.cl.cam.ac.uk/~ey204/pubs/2014_EyeTrack.pdf